様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：３４３１２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５００９１８

研究課題名（和文）「都市の過疎地」における高齢者の日常生活行動の実態と住環境のあり方

研究課題名（英文）Living Activities and Living Environment of Elderly Residents in Depopulated Urbarn Area

研究代表者
竹原　広実（TAKEHARA, Hiromi）

京都ノートルダム女子大学・生活福祉文化学部・教授

研究者番号：２０２９８７０６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円、（間接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は地域の独自性に着目し、都市の過疎地の地域（Ｉ，Ｋ地区）を対象に、そこに居住する高齢者の日常生活行動や住環境に対する評価より、地域独自のニーズを探ることを目的として行った。（１）I地区を対象に、住環境評価に関する質問紙調査を行った結果、買物及び交通バリアに対するニーズが高いこと、年齢層や家族形態によってニーズが異なること、などが明らかとなった。（２）Ｋ地区を対象に、高齢者10名を被験者にGPSによる外出行動実験を行った結果、外出行動は身体活動量の増加に関連していること、自宅周辺250-500m圏内を徒歩または自転車で頻繁に出かける外出行動が多いことなどが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on urban depopulation in the "I" and "K" district , areas with a high rate of aging within Kyoto City, a city designated by government ordinance. The everyday life and living environment of elderly people and those approaching this age group are investigated to identify new needs of local residents.(1)Residential environment assessment by using the questionnaires (I district): Subjects feel inconvenience of public transport use and few shops in everyday shopping district. The needs were different by age and family form.(2) Analysis of elderly outdoor activity by using orbits of the global positioning system (K district): There was a correlation between volume of total activity and outdoor activity. Most of elderly travel on foot or bicycle within the range 250 to 500 meters from their home.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：高齢者　過疎　日常生活　地域　外出行動

１．研究開始当初の背景

超高齢社会において求められているのは高齢者が自立して安全かつ快適な生活を維持できるような生活技術、生活環境の開発と普及である。住宅政策においても高齢者が安心して暮らせる住環境の質の向上を目的として、介護保険制度や住生活基本法の施行など法整備は推進してきた。また多方面で高齢者の身体機能に適した設備、環境への取り組みもなされ、社会福祉の充実した生活環境の整備を目指して始動している。しかし公的サービスに公正さが確保されていなかったり、サービスが地域のニーズに即していない様子も報告されている。このことはサービスを提供する側と受ける側でのＱＯＬの評価尺度が合致していないことを窺わせる。不確定要素を多く内在した長い高齢期に十分に対応しうるためには、地域独自のニーズに応じ、様々な日常的な場面に対応できるきめ細かな取り組みが必要である。高齢者を扱う既往研究の中で、地域の独自性に着目した研究は、離島や被災地を対象とするもの以外、殆ど見当たらない。当該研究は「都市の過疎地」を対象とするが、これは近年日本各地、同現象がみられ、必ずしも特殊な例とはいえない。高齢者が地域で健やかに暮らすことができることは、すなわち、活力に満ちた地域社会の実現にもつながると考えられることから、学術的に意義ある研究と認識している。

２．研究の目的

長い高齢期を地域で自立して健やかに暮らすことができることは、活力に満ちた地域社会の実現にもつながる。そのためには地域独自のニーズに応じ、様々な日常的な場面に対応できるきめ細かな取り組みが必要である。当該研究は地域の独自性に着目し、「都市の過疎地」且つ「高齢化率 30%以上」という特徴的な地域を事例として取り上げる。そしてそこに居住する高齢者の日常生活行動や住環境の実態と現状に対する評価を明らかにし、高齢者の自立を妨げない住環境のあり方について、地域独自の新たなニーズを探ることを目的としている。また単なる事例研究に留まるのではなく、地域独自のニーズを探求するための研究手法の構築を目指す。

３．研究の方法

本研究課題は、(1)住環境評価とニーズに関する調査と、(2)外出行動に関する実験の２つで構成されている。

（１）住環境評価とニーズに関する調査

対象地であるＩ地区（高齢化率 29.3%）の住民 2000 世帯（全世帯数の 87%）を対象に自記入による質問紙調査を実施した。調査項目は生活環境、社会基盤、健康・福祉、教育・文化、産業振興、住民参加の 6 分野 55 項目について満足度と重要度、及び地域に住み続けたい理由、住み続けにくいと考える理由である。

（２）高齢者の外出行動に関する実験

被験者は対象地のＫ地区（高齢化率 34.5%）に居住する自立した生活をおくる高齢女性 10 名（前期高齢者 7 名、後期高齢者 3 名）である。実験期間は連続 48 時間とし、日常生活や自尊感情に関する質問紙調査、調査期間中の生活行動記録(日記形式)、加速度計による身体活動量計測、GPS 端末による外出時の位置情報計測により得られたデータを基に分析を行った。

４．研究成果

（１）住環境評価とニーズに関する調査

有効回答票 305 票（回収率 15%）を得た。回答者は男性 40%、女性 60%、60 歳以上 55%、平均居住年数 35.6 年であった。

地域の住環境に対する総合満足度は[満足][やや満足]は 42%、[不満][やや不満]は 13%である。年代別にみると 30,40 代は最も満足評価は高く[満足][やや満足]は約 60%であり、この年代をピークに 50,60,70,80 代と年齢が高くなるに従い 80 代は 36%と満足評価は低い。このことは加齢に伴い住環境に満足しがたい要因があることを窺わせる。しかしこれは[普通]評価が増加しているもので[不満]が増えているわけではない。一方、20 代は不満評価の[やや不満]が 40%と高く他年代と比べて突出している。若年層の流出を抑えるにはこの層のニーズを把握することは重要である。

総合満足度と関連の強い項目は年代による若干差異がみられた。高齢者は[身近な公園や広場の整備・充実][水や緑などの自然の豊かさの保全と活用]、中年者は[近所づきあいのコミュニティ活動の促進・充実]、若年者は[防犯面の安全性確保][情報通信基盤の充実][地域内での雇用の確保]などであり、また中年者と若年者は共通して[路線バスの充実]が総合満足度と関連が強い。

また満足度が低く重要度が高かった項目（重要であるにもかかわらず満足できる状態でない）は年代問わず[歩行者や自転車の交通安全の確保][商業振興や日常の買物の利便性の向上]である。高齢者で顕著な項目は[身近な広場や公園の整備・充実][魅力ある住宅地や住環境の整備]である。

[生活環境][社会基盤][健康・福祉][教育・文化][産業振興][住民参加]の６要素のうち重要とする度合いの強い順位について[生活環境]は全世代でいずれも１位と最も重要とされている要素であり、[社会基盤]は 20 代で重視度が極めて高い。[健康・福祉]は年代が高くなるほどに重要度は高くなる傾向が認められる。[教育・文化]の年代差はあまり際立っていないが 20、80 代で重要視する傾向は低めである。[産業振興]はどの年代も[住民参加]と並んで重視度は低く、[住民参加]は 60、70、80 代と年齢が高くなるにつれ重視度が高くなる傾向を示す。

さらに高齢者世帯を[独居][夫婦のみ][子

どもと同居]に分けて検討したところ、図１に示す通り[独居]は[健康・福祉分野]を１位とした者が多く[住民参加]も重要とするものが多く、世帯形態により要望やニーズが異なる。

以上、当該地区において交通バリア、日常の買物バリアに対するニーズが高いこと、若年者は他の年代と異なり不満評価が高く、地域内での就業の機会を望んでいること、高齢者は広場や公園といった屋外空間の充実に対する要望が強いことなど、年齢層によって満足度やニーズに差がみられた。また高齢者の特に独居生活者は健康に対する不安や周囲とのコミュニケーションの機会となる住民参加の機会があることを要望していることなどが明らかとなった。増加する高齢者層だけでなく若年者層についても目を向け、このような属性によるニーズの差異を地域として包括できるような具体策につなげていくことが活性化には必要であると考えられる。

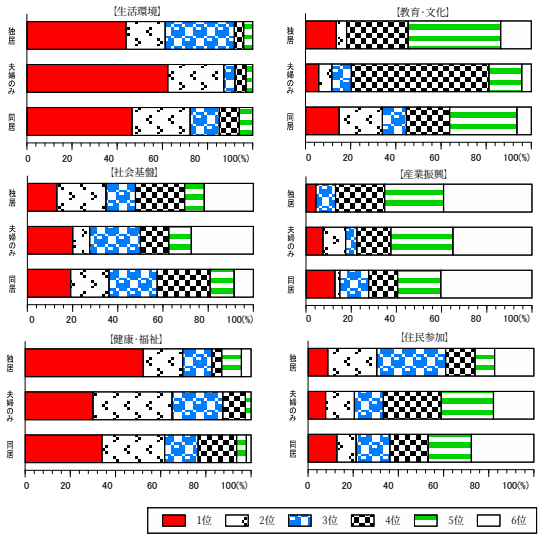

図１　世帯形態別にみた高齢者層のニーズ

（２）高齢者の外出行動に関する実験

①被験者の日常生活と自尊意識

地域交流について、全員が町内会行事や農協などの旅行、習い事など何らかの活動に参加していた。健康については全員三食の食事をし、睡眠時間は 6～8 時間、夜間の目覚めは１回程度とよく眠れているなど健康である。ＴＶ視聴時間は大半が 2 時間程度で日常的に外出をしている。昨年度と比較しての外出回数は減っていない。また日々の生活の充実感については全員が[充実している][朝起きて今日何を過ごすか困ることはない]と回答している。[周囲から期待されていると思うか][私がいないとだめだと思うか]については 9 人中 7 人がそう思うと答えるなど、対象者は全体的に心身とも健康状態は良好といえる。

②加速度計による身体活動量

被験者自身による生活行動記録より、生活行動を要した時間の長い順に順位付けして検討を行ったところ、被験者は[１位:外出、2 位:家事] [１位:外出、2 位:休憩] [１位:家事、2 位:外出] [１位:家事、2 位:休憩] の４つのグループに分類され、家事と外出が生活の多くに時間が割かれていることが明らかとなった。また[家事]が１位のケースと[外出]が１位のケースについて身体総活動量を比較したところ、図２に示す通り[外出]が１位の方が有意に活動量は高い($p<0.05$)。身体総活動量と外出活動量との関連について相関係数 0.98、外出時間は 0.52 と関連が強い。これらのことから、[外出]は身体活動量に影響を及ぼし、活動的な生活を送ることに貢献するといえる。

③GPS 端末による外出時行動計測

調査期間中の被験者の外出行動の概要について、外出回数は 4.3 回/日、移動距離は 20.1km/日であった。大学生の 9.2km/日（通学への片道 2.25km を含む、著者調べ）と比べて多い。

図３に外出に関する要因間の関連について相関関係を示す。外出活動量と関連が見られた項目は[外出時間]r=0.61 であり[行動範囲][移動距離]との関連は弱い。また外出時間と関連がある項目は[行動範囲]r=0.65、[行動範囲]は[移動距離]と r=0.41 である。このことから外出活動量は行動範囲や移動距離との直接的な関連はないことが窺える。外出の内容について詳細にみると、行動範囲は自宅からの距離が 250～500m 圏が最多である。外出先は外出総件数 67 件のうち[田畑]が 35 件と最も多く半数以上を占め、次いで運動(散歩)、友人宅、趣味・娯楽、買物の順であった。移動手段は[徒歩][自転車][車][バイク]であり地区内を走る[路線バス]の利用はなかった。[徒歩]による外出は全員にみられ平均 3.8 回/人である。[自転車]は７人が利用し利用者の自転車による外出回数は平均 4 回/人であるが、10 回外出している者もある。[車]は 7 人が利用しうち１人は同乗、平均利用回数は 2.5 回、[バイク]は１人１回の利用があった。図４に示す通り[0～50m]圏内は[徒歩]で田畑へ、[50～500m]圏内は[徒歩または自転車]で田畑、友人宅、地域交流、趣味が外出先であり、[1000m]圏外は趣味や買物のための[車やバイク]利用であった。

以上、当該地区における外出行動の特徴は、活動範囲がそれほど広くないが頻繁に外出する者が多くみられ、行動範囲が狭くとも近隣と交流があることで行動量（外出時間、移動距離）が増加し、それが身体活動量の増加にも貢献している。そして自宅周囲の田畑において行われる作物や花の日々の世話が、日常的な外出(屋外活動)の場、交流の機会となっていた。また趣味活動は公館でなく近隣の社寺で行われ参加がみられ地元資源が地域交流の場として活用されている様子がみら

れた。今後の課題として趣味や娯楽へは自ら車を運転して参加するケースが多かったことから、加齢にともない車利用に制限が加わる可能性も考えられ、今後の課題である。

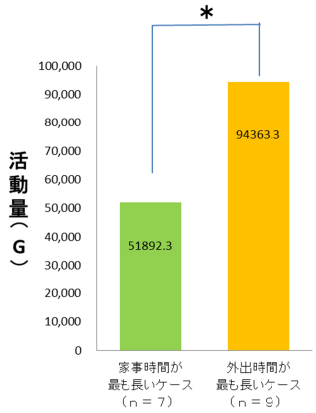

図２ 外出時間が最も長いケース群と家事時間が最も長いケース群の身体総活動量比較

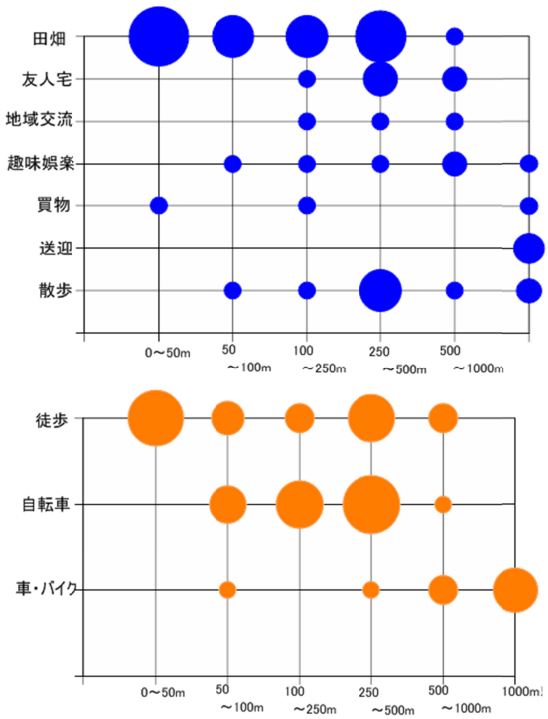

図４ 外出先、
移動距離・手段の傾向

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計３件）

①竹原広実、高齢者の日常生活における外出行動　京都市Ｋ地区の事例、日本家政学会年次大会、九州国際会議場、2014.05.25

②竹原広実、都市の過疎地区における高齢者の住環境評価とニーズに関する研究、日本家政学会年次大会、昭和女子大学、2013.05.19

③Hiromi TAKEHARA ,Yoko SHIMIZU, Living Activities and Living Environment of Elderly Residents in Depopulated Urban Areas, IFHE(International Federation for Home Economics), Melbourne Convention and Exhibition Centre,2012.07.19

６．研究組織

(1)研究代表者
竹原　広実（TAKEHARA Hiromi）
京都ノートルダム女子大学・生活福祉文化学部・教授
研究者番号：２０２９８７０６

(2)研究分担者
清水　陽子（SHIMIZU Yoko）
関西学院大学・総合政策学部・准教授
研究者番号：７０４５７１３３

(3)連携研究者
三好　明夫（MIYOSHI Akio）
京都ノートルダム女子大学・生活福祉文化学部・教授
研究者番号：４０４０８２９０

(4)連携研究者
酒井　久美子（SAKAI Kumiko）
京都ノートルダム女子大学・生活福祉文化学部・准教授
研究者番号：９０２４０４５７

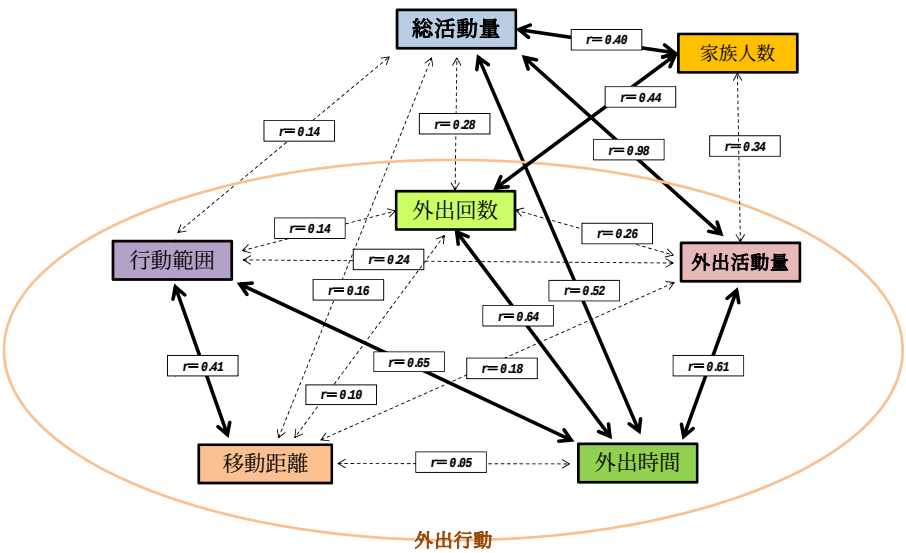

図３ 身体総活動量と
外出各要因との関連
（相関係数）